

幼児のことばの発達と保育 (三)



花 上 洋 代

Ⅲ ことばの保育

(一)、(二)ではことばの発達について述べてきましたが、今回は子どものことばの先生である母親のことばに焦点をあてた二つの研究を紹介し、次に話しことばのもつ特徴を述べ、それらと関連させながら、ことばの保育について述べてみようと思います。

A 乳児に話しかけている母親のことば

私の所属しております言語障害研究室(お茶の水女子大学・田口研究室)ではことばの発達に関するいくつかの研究がすすんでおり、その中に、赤ちゃんに話しかけているお母さんのことばを分析した研究が二つあります。一つは増井美代子さんの「乳児期

における言語習得過程に関する一研究―母親のことばの分析を中心に―」―児童学科修士論文、昭和四十三年三月―。もうひとつは白井順子さんの研究「乳幼児の言語習得過程に関する一考察―母子の会話の分析」―児童学科卒業論文、昭和四十四年三月―です。増井さんは生後二十八日から三月二十三日までの幼児十名とその母親についてことばの状態をしらべました。家庭訪問をし、母子がいつしよにいる自然な場面を十分―十五分録音し、その録音をもとに幼児に話しかけている母親のことばを分析しました。増井さんはその特徴を次のように述べています。

(一)母親は乳児の声によく反応する。乳児の発声を中断しないでよく聞いてやり、うなずき、ほほえみ、あいづちをうち、まねをする。このような身振りや声による応答は乳児の発声にとって「快」の経験となる。

(二) 乳児がどんな発声をしても決してとがめたり叱ったり矯正したりしない。

(三) 単純なことばでくり返し話しかけている。これはことばの印象づけにとって効果的である。

(四) 文法的にきちんとしている。息つき、抑揚などから判断される聴覚的なひとまとまりが意味内容的にもそのままひとまとまりであることが多い。

(五) 抑揚の変化が激しく大きである。意味内容的に重要である語には強勢がおかれ、その前後のことばには快いメロディーがあり、前奏や間奏の役割を果たしている。この前奏が聞こえると、子どもは聞きとるべき重要なことばが次にやってくるのを予期し、自己の中に聞きとるべき準備状態を作る。

(六) 母親が乳児に話しかけていることばは二歳六カ月から五歳〇カ月の子どものことばと似ている。平均三・一語文であり、一語文の数は三歳の子どもの同じレベルであり、幼児音へのおきかえ(サカナをチャカナというような)がみられる。短い文であるため聞きとりやすく、文法ルールもみつげ出しやすい。

白井さんは生後一カ月から三歳十カ月までの乳幼児二十二名とその母親について増井さんと同じような研究方法で行ないました。白井さんの研究からは次のようなことがわかりました。

形式に関して、

(一) 子どもの理解力が未熟な時、母親のことばはメロディーが豊富(Melodic)で声の調子(pitch)が高い、この音楽的役割は子どもの理解力向上と共に消失していく。

(二) 母親のことばは全体に単純ですっきりした文であり、幼児音へのおきかえがみられる。二歳六カ月から五歳〇カ月の子どもがしゃべるような文章であるが子どもの言語能力の発達に平行して母親のことばも変化する。子どもが八カ月頃までは比較的長い文をしゃべっているが十カ月頃になり物の名まえがいくつかわかり、まねをするようになると、ことばのレベルを下げ急に一語文が多くなる。短いことばでしゃべる。子どもが二歳をすぎるとまた文章が長くなる。

(三) 音、語、文のくり返しは一歳〇カ月から一歳六カ月に多い。これは楽しいふんいきを作る。

内容に関しては、
(四) 子どもの能力が未熟な頃、母親のことばにはよびかけ、詠嘆表現が多い。

一歳から二歳にかけては子どもの知っていることばを何度もくり返し話しかけている。子どもの発達と共に質問的表現が増加し三歳以後は子どもの発話に対する応答表現が多い。

母子の会話場面の特徵に関しては、

(五) 喃語期は子どもがしゃべり、母親がそれにあわせてしゃべること

とが多い。始語期以後は母親が話しはじめるほうが多い。

(六)子どもの発話をまねしている率は子どもの発達と共に高くなっていく。始語期前はそのまままねをするが始語期以後は拡充模倣(子どもが「ブーブー」と言ったとき「あっブーブー来たね」というように内容を拡げて模倣すること)や訂正的模倣(「ワンワン、タ」と子どもが言った場合「そう、ワンワンが来たね」というように応答することなど)が多くなる。

以上の結果から白井さんは次のように考察しています。

(一)母親のことは最初は音楽的意味をもち、ふんいきを楽しくするような働きが大きい、次第に意味内容が重要になり、ことばのモデルとしての役割も大きくなって行く。

(二)喃語期には母親は子どもを尊重している。この時期に子どもは十分、発声と構音の練習をする。

(三)子どもの能力が表面に出始めた頃(十カ月〜十一カ月頃)、母親のことは最も子どものレベルに近づき、言語習得上とくみやすい刺激となっている。

(四)始語期以後は子どもの能力の一、二歩上の言語刺激を与え、子どもの文章構成法習得を助けている。

これら二つの研究結果と八、九月号に述べたことばの発達過程とを比較してみますと、驚くほど関連深い現象がみられます。た

とえば、生後六カ月まで、外界(人や物)に気づき、外界への興味が増して来る時期には、母親のことは快い音楽的刺激という要素が強く、声に興味をもって聞くという態度を育てるのに非常に役立つています。また、乳児の自発的な発声に対しては、受入れ、あいつちをうち、発声を励ますような刺激となっています。

これは、自己活動が人と共にいることで伸びていくという方向へ進むためのよい刺激にもなっています。十カ月、十一カ月になり、発音の面でも模倣活動が盛んになってくると、母親は子どもが模倣しやすいレベルにことばの手本を下げ、具体的な事物について時には指さしながら短いことばで何度も話してくれます。この頃はまだ歩けませんから、抱っこをしながらまたはひざの上に抱いて、楽しいふんいきの中でごく近い距離から、大きな声で、何回も、子どもが指さした物や興味のあることについて話してくれます。一歳過ぎて子どもが一つ二つことばを言うようになり、いろいろな物の名まえに興味をもつ頃になると今まではマナマで一括していたものも、パン、ゴハン、バスケットなどということばで表わしてくれますし、少し内容を拡大した形であいつちをうってくれます。おしゃべりが上手になりかけてくるといろいろ質問をしておしゃべり練習を促進してくれるし、結果的には質問の仕方とも教えてくれているのです。

このような関連現象は後でことばの保育について考える際に大

切な観点になります。

B 話しことばのもつ特徴

(一)話しことばの専門器官は存在しない。

人間はおしゃべりをしなくとも生きていきます。けれども息をしなかったり、食物を食べなかったりすれば生きていけません。ことばをしゃべるときに働く末梢器官は、肺、横かく膜、胸かくの筋肉、気管、喉頭、(声帯を含む)咽頭、鼻腔、口唇、舌、歯、軟口蓋、ほほの筋肉、などですが、これらの器官は皆、息をしただり、食物を食べたり、生命を維持するための器官です。声帯でさえ本来の任務は異物を気管内に入れないようにしたり、胸腔内の息の圧力を保ったりすることであり、声を出すことではありません。ですからこれらの諸器官が本来の任務をはたしている時にはしゃべることができません。激しい運動をした直後にしゃべれないのも、呼吸という本来の任務に忙しくて余裕がないのです。また、非常に気がふさいでいる時にはしゃべる気になれないことからもわかりますように、精神的にも十分生存可能で余裕のある時にのみ話しことばの器官は機能を發揮するのです。話しことばはひまな時に行なうレジャー活動といえましょう。ですから話しことばが発達するためには精神的にも肉体的にも余裕のある状態を維持し続けることが必要なのです。

(二)しゃべることは無意識に行なっている運動である。

発声・発語器官の動きは、本来、息を吸ったり、物を嚙んだり飲み込んだり、というように反射的なものです。ねごとが言えるのもそのためであるといわれています。しゃべり方を意識して変えようとすればその分だけよいエネルギーが必要になり、そのために呼吸をたくさんする必要ができたり、なおしゃべりにくい状況が用意されることになります。また、人が普通にしゃべっている時の口の形の形は一秒間に二十回という速さで変化すると言われています。ですから一度学習してしまった舌や軟口蓋の運動を、その動かし方に注意することによって変えようとしても不可能です。

(三)話しことばは学習されたものである。

日本語環境の中に生まれ、育てば日本語をしゃべるようになり、英語を使う人々の間で育てば英語をしゃべるようになります。話しことばは決して生まれつきもっているものではなく、子どもの側の条件もありますが、教える人がいて、その子にあった教え方をされてはじめて学習されるものです。

C ことばの保育

母親はことばの教え方を誰からも教えられずにわが子にことばを教えています。そして多くの場合教えているのだということも

意識しないうちに、ことばの発達の順序性も個人差にも気づかぬうちに子どもがしゃべり始めます。大部分の子どもが一、二年のうちに自然としゃべり始めるのですからお母さん先生はとてもよい教え方をしているに違いありません。事実、話しことばの特徴として述べた三つの面に照らしてみても非常に適切な教え方をしています。一歳未満の子どものお母さんは発音に関して決して文句をいいません。言い直させたり、無理に言わせようとしたりしません。お母さんの声を聞くこと、声を出すことが気持のよい経験となり、気楽な気分でも何度も試行錯誤を行なうことができるようになっていきます。お母さんは子どもの発音がどんなに日本語に遠いものであっても、喜んで受け入れ、あいづちをうってくれます。おしゃべりをするという楽しい活動を毎日毎日くり返し行なっているうちに、非常なスピードと正確さを要求する構音運動学習ができるようになるのです。

お母さんは赤ちゃんを信じているのです。お母さんは赤ちゃんにたえず話しかけます。赤ちゃんがまるつきりことばを理解できない頃から、もうことばがわかるかのように、または将来かならずことばがわかるようになるかと信じて、ことあるごとに話しかけています。ある本の中に「まわりの人が一特に子どもが信頼をよせている人が、この子はのびる力をもった子どもだと心から信じ、子どももまた、そのように信頼されていることを信じた場

合、その子どもは成長する」という意味のことばがありました。ことばの発達も同じことのように思います。母と子の信頼関係が育つ中で自発性がのび、その一つの面としてことばも伸びていくのではないのでしょうか。

前に述べた二つの研究からもわかりますように、子どもが順調にしゃべり始めた場合には母親は無意識のうちに子どもの変化・進歩に即して話しかけ方を変化させていっています。しかし多くの子どもたちと発達のテンポが異なる子どもの場合には母親は教え方がわからなくなってしまいうことが多いのです。「ことばの発達の遅れ」が気になりはじめると、個人の中の順序性ということが消えてしまい、一般的な順序性だけが大きくあらわれ、それも個々のステップでなく、大部分の子ども、もしくは発達の早い子どもたちが今登ろうとしているステップだけが目だってとらえられるようになります。ですから階段の一段目から一挙に最上段の二階へとび上がらせようとするような教え方をしがちになります。子どもの顔を見るたびにことばが心配になるようだと、母親にとってもうれしく楽しい経験であるはずの子どものおしゃべりも内容が変わり、量的にも少なくなるでしょう。そのような場合、ことばの発達の順序性、個人差などについて知ることができれば、今その子どもがもっていることばを、そのことばを使っている子どもを、受け入れ、尊重することができるようになるかも

しれません。少なくともその手助けにはなると思います。現在あるがままの状態を受け入れるところからことばの学習は始まりま
す。もし、どんな場合にも目の前にいる子どもを人として尊重し
てふるまうことができればもうそれでいい、教え方はその子が教
えてくれるように思います。

私たちは、子どもとのおしゃべりを通じて、ことばの使い方の
お手本を示しているわけですが、同時に物の見方、感じ方をも示
しているのです。私たちのことばは、子どもが言ったりしたりす
ることへの人々の反応の一部でもあるのです。子どもはそのなか
ら人への信頼、または不信を学び、人間関係の基礎を学びます。

幼稚園の教育要領の中に言語領域の目標として次のようなこと
が挙げてありました。

(一)人のことばや話などを聞いてわかるようになる。
(二)経験したことや自分の思うことなどを話すことができるよう
なる。

(三)日常生活に必要なことばが正しく使えるようになる。

(四)絵本、紙しばいなどに親しみ、想像力を豊かにする。

これらと対応させて先生側の課題を書いてみると次のようにな
るのではないでしょうか。

(一)ひとりひとりの子どもに即してその子がわかるようなことばを

しゃべるようにする。

(二)ひとりひとりの子どもがのびのびとしゃべることのできるふん
いきを作る。子どもの話をよく聞いてあげるようにする。

(三)日常生活に必要なことばを正しく使えるような状況をいつも用
意しておいてあげる。

(四)その子の想像力を豊かにするには、その子が何に興味があるか
をまず知らねばならない。

言語によるかわりあいを通して、子どもと先生、人と人との
信頼関係が育つようにするのがことばの保育の目標ではないでし
ょうか。

おわりに、この原稿の基礎になった言語能力発達質問紙及び言
語発達輪郭図(仮称)の作成にあたりご指導いただきました田口
恒夫先生、松村康平先生に心から御礼申し上げます。
(お茶の水女子大学)

【引用文献】

- 1、増井美代子・乳児期における言語習得過程に関する一研究——母親
のことばの分析を中心に——昭和四十二年皮児童学科修士論文
- 2、白井順子・乳幼児の言語習得過程に関する一考察——母子の会話の
分析——昭和四十三年皮児童学科卒業論文
- 3、ウェンデル・ジョンソン著・田口恒夫訳・教室の言語障害児第二章
言語障害研究六十七号、昭和四十二年
- 4、Robert Rosenthal, Lenore Jacobson; Pymation in the classroom,
Holt, Rinehart and Winston, Inc. 1968